

取材先で、思わぬかたちで耳にする「いい言葉」。その「いい言葉」こそが、読み手の心に届く文章には不可欠となります。今回は、取材の中から生まれた「いい言葉」と、その大切さについて、まとめていただきました。

「花には蜜があるように」

取材のときに「いい言葉」に出会うことができるかどうか。これは文章のできばえを左右する関所のようなものだろう。

作家の水上勉さんに「椿をめぐる話」を聞きにいったことがある。京都の仕事部屋で二時間ほど話を聞き、取材を終えた。辞そうとすると、水上さんは自筆の、一枚の椿の絵をもつて私に下さるといふ。

洒脱な、いい絵だった。「心臓の病で危篤状態になった後、これを何枚も描くことで命が助かったんです」。水上さんがいった。なぜです。なぜ椿の絵を描くことで救われたのですかと私は聞いた。

生と死の別れ道をさまよった直後、福岡の寺のご住職が、大きな藪椿の枝をもって見舞いにきてくれた。寺の裏山に咲く椿だ。

病床で、次々に蕾が開くさまを見て、両親の墓に咲く椿の花を思いだした。水上さんにとって椿はいちばん心を癒してくれる花だった。毎日、一輪ずつ描いた。一輪、描く

ごとに、椿の生命力が水上さんに乗り移り、ついに生き延びることができた。長い物語を、はしよつていえばそういうことになる。

「椿の絵を描くことで、命が救われた」という言葉の背景を描く補強取材に何日もかかったが、この言葉が原稿の柱になったことはいうまでもない。二時間の取材では得られなかった「いい言葉」が、帰り際の一瞬に飛びだす。そこが取材のおもしろさだ。

◎ 高崎市に住む友人、瀧田吉一さんのエッセイ集に「足袋を繕う話」がある。瀧田さんは近在の人とのつきあいが広がった。

ある日、八十過ぎの女性の健康状態を知りたくて訪ねた。彼女は縁側に何足もの足袋をひろげて繕っていた。なかにはいくらか繕っても、もう履けないと思えるものがあつた。そのことを尋ねると、おばあさんは答えた。

「ええ、これはもう履けません。でも長い間世話になった足袋です。処分するにしても、

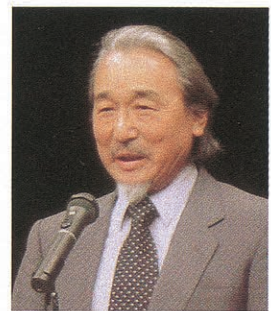
ちゃんと繕つてからと思ひましてね」

ちゃんと言葉だ。こういう言葉にごく自然に出あうということは、瀧田さんが日ごろから丁寧にとつきあっている証拠なのだ。

どんなに短い文章でも、そこには、心に残るいい言葉、いい逸話、つまり中核になる文章が一つはあつたほうがいい。その中核になる文章を読み手の心に届けたいという筆者の熱い思いがあつたほうがいい。

花には蜜がある。チョウやアブやハチは、その花の蜜を求めて花にもぐりこんでくる。逆に、花びらがいくらかきれいに装つて虫を誘つても、花に、肝心の蜜がなければ虫はやがて来なくなる。文章も同じだろう。心に残るだけの「いい言葉」のない文章は、読み手に読んでもらえない。

花には蜜があるように、文章もまた「花の蜜」にかなうものを用意したほうがいい。「蜜」のない文章は読み手の心に届かない。



●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。